



TITLE:

# <大會抄録>乾隆カシュガル蜂起： 伯克支配力とオアシス権力構造基 底部

AUTHOR(S):

眞田, 安

---

CITATION:

眞田, 安. <大會抄録>乾隆カシュガル蜂起：伯克支配力とオアシス権力構造基底部. 東洋史研究 1989, 48(3): 600-601

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154281>

RIGHT:

帛、とりわけ帛は富として所藏されることもあったが、前漢後期に貨幣的機能をも始め、王莽代以降、後漢代に貨幣化する。そしてこれは右の衰退という事態と相應する。

### ホージャ・アフラールの不動産登記文書

——十五世紀中央アジアの不動産所有について——

川 本 正 知

十五世紀後半、ティムール朝治下のサマルカンドにおいて、イスラム神祕主義教團ナクシュバンディー教團のシャイフとして活動したホージャ・アフラールは莫大な不動産を所有していたことが知られていた。しかし、その實態を具體的に知ることができるようになったのは、一九七四年チェホヴィチによって、彼の不動産に関する文書集が出版されたことによる。

この文書集には十五世紀の文書が十二通含まれ、そのうちの四通がワクフ文書、残りの八通がいわゆる不動産登記文書である。イスラム圏全體を見回してもこの八通の不動産登記文書は、出版されたものとしてはもっとも初期のものに屬する。

この八通の不動産登記文書の書式、内容を調べていくことによって當時の中央アジアにおける不動産所有、すなわち *malik* 所有とはどういうことであったかを明らかにしてみたいと思う。それはおそらく、ワクフと同じように、單に中央アジアにとどまらずイスラム圏全體におけるこの時期の不動産所有ということを考えるための一

例とすることができるであらう。また、そうすることによってホージャ・アフラールという人物の莫大な不動産所有を當時のイスラム社會の文脈の中で正當に評價することができるであらう。

### 乾隆カシユガル蜂起

——伯克支配力とオアシス權力構造基底部——

眞 田 安

乾隆二十五年七月に、カシユガル地方のベシユケリム地方を中心に蜂起が發生した。この蜂起は、清朝の新疆統治上の觀點からすれば微々たるものにすぎなかったが、この蜂起を分析することによって、あたかも火山から噴出したマグマの分析が地球の内奥部を知らしめるように、オアシス社會の内部が明らかになってくる。

當蜂起の指導者は、行政行爲を逸脱した權力行使を専らにしていたというウイグル人支配者伯克 (*Bek*) 層のうち、征服者清朝と結びついた三品阿奇木伯克とは別の、カシユガルで採用、任命された、いわば土着伯克層である。この伯克たちの動向、蜂起の原因、動員力、地域的廣がりを考えることにより、土着伯克の支配力の實像が浮びあがる。彼ら伯克の支配力の實態の中に、征服者權力と同時に土着支配者からもウイグル人民衆が支配されていた支配の枠組、換言すれば支配者側の權力行使が可能な權力構造の、その基底部分が露わになっている。そして、そのような民衆に對する權力の接點の部分が見えて來た時、かつてラケットがワクフ文書として紹

介したカシュガル・ハーン、ヨルバルスの一六六二年の敕令——軍事行動などを評價して配下のベクにベシケリム地方の土地と水利權を恩賜することを告示したもの——を、オアシス社會のあり方という觀點から光を當ててみるのが可能となる。これにより、清朝支配期に先行するカシュガル・ハーン國、ホージャ政權時代を含め、ウイグル民族社會が形成されて來たという十六——十九世紀のカシュガリアのオアシス社會の社會構造上の基本的性格を一層ふみこんで理解することができる。

## 十五・六世紀南インドにおける職人層の

擡頭について

辛島 昇

ヴィジャナガル期（一三三六—一六四九）のタミル語刻文を讀んでいると、その時代のインド半島東南岸のタミル地方で、手工業が發展した様子を見て取ることができる。そのことは、手工業に關係する税目の検討からも言いうるが、この報告では、織布工であるカイコラと鍛冶工であるカンマラの權利について記す、それぞれ五つの刻文（十五・六世紀）を取り上げて、論じることにする。

初めの五刻文は、タミル地方中部のカイコラ達が、特別の機會に與に乗り法螺貝を吹く權利を地方領主によって認められたこと、後の五刻文は、同地方のカンマラ達が、地主層によって課されていた三つの特別税を免除されたことを記している。兩者の場合と

も、それらの權利は、先ずタミル地方北部で認められ、それが中部にまでおし廣げられたことが分かる。

ヴィジャナガル期の多くのタミル語刻文からは、王に忠節を誓う地方領主が、職人達を寺領に住みつかせて庇護を與えた様子をも見て取れるが、ここで検討する十刻文は、十五・六世紀における職人層の擡頭が、ヴィジャナガル王國のタミル地方支配の進展と密接に關連していることをよく示している。それはまた、當然のことながら、當時の商業、とくに外國貿易の發展とも深く關連するものである。

## 清末の經世思想と經世學

大谷 敏夫

清末の經世思想研究は、賀長齡に代つて魏源が編纂した「皇朝經世文編」をもつて始まる。「經世文編」編纂は、この賀氏の「經世文編」をモデルとして清末まで繼續して行なわれた。ここに經世思想研究は、經世學という一つの學術分野を形成することになる。魏源はその著の中で、「學篇」「治篇」という項目を設けたが、經世學を治學として重視したところにその意義がある。魏源は、「公羊學」をその思想的根據としたが、この「公羊學」のもつ變革理論は魏源以後の公羊學者に受けつがれ、最終的に康有爲の學術に繼承された。しかしこの流れとは相互に關連しつつ體制教學であつた朱子學に經世的概念を加味したものもあらわれる。それは曾國藩によつ